

**オランダでミニバラと出会い
独自の栽培方法で大量生産へ**

クリスマスや迎春のほか、近年は1月31日の愛妻の日や、欧米風に女性に贈るバレンタインデーの贈り物にと、色を失った冬のまちや暮らしに鮮やかな彩りを添えてくれるミニバラ。特にポットローズは、切花より長く楽しめるので大人気です。

また、剪定して次の花を育てられる楽しみが、コロナ禍で注目され、ガーデニング愛好家の間でファンが急増。色とりどりの優美な花と香りが多い人の心を癒し、励まし、笑顔にしています。

そのミニバラの生産販売でトップシェアを誇るセントラルローズは、1973（昭和48）年に代表取締役・大西隆さんが創業し、バラ苗の生産を行っていましたが、1987（昭和62）年、オランダ農業視察団に参加してミニバラに出合った大西さんはその可愛らしさに魅了され、単独でオランダに留まり、ミニバラの品種や自動化された生産方法を学びました。

当時の日本では零細な露地栽培が主流でしたが、大西さんが目にしたのは巨大なハウスの中で、挿し木したポットがベルトコンベヤーで流れ、1週間〜10日で芽が出ると、2、3カ月後には出荷できる自動システム。その驚きと感動は計り知れません。

日本に帰った大西さんは露地から温室栽培に切り替え、当初は990平方メートルのハウス1棟の中にオランダ同様の移動可能な栽培用ベンチを入れ、独自に改良した自動養液循環システムを導入。すると圧倒的に作業効率が上がり、低コストが実現し、鉢植えのバラの周年生産にも成功します。

苦労したのは挿し木の生産技術の習得。日本の風土に合う方法や用土の改良に試行錯誤。苦闘の末に周年出荷を可能にして販売を開始すると、珍しいミニバラは人気を博します。その需要に応えるべく温室を増設。資金調達にも苦労しましたが、制度資金を運用し、ミニバラ栽培に専念して年間約10万鉢だった出荷量は90（平成2）年には約30万鉢に。害虫被害で全滅の危機も2回乗り越えて着々と事業規模を拡大し続け、現在は約2万平方メートルの温室から、全国シェアトップの約200万鉢を



1.切っても、また芽が出る。枝を伸ばす生命力に「咲いてくれてありがとう」と志信さん
2.企業的な農業へ移行して伸ばした業績や、県内の花き産業の振興への貢献などが高く評価され、これまでに「岐阜県民栄誉賞」も受賞
3.バラのカットは機械で行います
4. We produce your smileというキャッチコピーからも思いが伝わりやす
5.ミニバラを生産する温室は、約2万平方メートルの広さ



巻頭特集 有限会社セントラルローズ

あふれんばかりの バラと幸福をあなたに

真冬の戸外でも咲き誇るミニバラの鉢物は、クリスマスの贈り物や、門松に代わる正月飾りなどに大人気。セントラルローズは、日本で初めてこのミニバラの鉢物生産と、その自動化導入による作業効率や出荷量、品質などを大幅に上げた実績が高く評価され、農林水産業界で最高の栄誉である「天皇杯」も受賞しました。結束の固い家族5人がその運営を行い、ミニバラづくりを通じて戦略的で工夫に富んだ、新しい農業の形も創出しています。

出荷しています。
販売方法や環境保全が課題
地域の異業種間とも連携

現在、大西さん家族5人で役割分担して経営、生産、販売を戦略的に行っています。経営部門を担うのは長男の裕さん。大西さんと共に生産部門で品質向上や生産開発を行うのは次男の誠さんです。パート従業員は40人。裕さんは「パートさんの力をなくしてこの事業は成り立たない」といいます。冬も温室の中は暑く、相当な運動量ですが勤続30年のベテランもいます。



大西裕さん(左)と誠さん(右)、広報を担当する大西志信さん(右下)



ウェブサイトはこちらから！

有限会社セントラルローズ
本巣市七五三一の坪772-4
058-324-7203 <https://www.centralrose.co.jp>



正月用のバラも人気です

ラを生産する品質改良など、科学技術が活かされ、すべてが数字で表せます」とのこと。生産の現場で培われた経験や勘も尊重して数字で見える化。私たちがおいしくできた料理を再現するために、レシピを残すように、より安定した生産を行うための栽培のノウハウは数字で記録し、さらなる改良や新品種開発に生かしているのです。

「今まではつくるだけでしたが、どうやって売るかがこの時代の課題」と裕さん。人口減少による需要縮小を見越して、よりお客様のニーズに合った商品の展開、提案を心がけています。

また、より環境に寄り添った経営をするために、日々生産と環境保全の両立を模索しています。「自分たちだけで考えるより、地域の異業種の方々や企業とつながって知恵をいただき、新しい取り組みに挑戦したい」と意気込みます。

**家族の交流を促す
ミニバラが持つ強み**

そして寄せ植えのアレンジや商品開発は創業者の妻、由美子さんが担当し、ニーズに合わせた新商品企画や、インターネットを駆使した販促と広報は裕さんの妻、志信さんが担当します。「義父母と夫、誠さんは互いに感謝し合い、絶大な信頼で結束している」と志信さん。「ミニバラはまず贈る人を笑顔にし、贈られた人や、飾られたバラを見る人たちも笑顔にする」、「剪定で再び花が咲かせ、枯れたと思ってもまた花が開く強さがあります。『また咲いたよ!』と、喜ぶ家族のコミュニケーションツールにもなる」など、志信さんが語るミニバラの魅力は尽きることはありません。

インターネットのお客様より育て方の相談がありアドバイスを返信したところ、今度は手書きのお礼の手紙が届き、みんなで感激したこと。「ミニバラはそうした交流や会話を生むだけでなく、私たちには見えないけれど、さまざまな場所や場面で幸せにつながる化学反応ももたらしていると思います」と笑顔を輝かせます。

一人でも多くの人々に幸せになってほしいと願う、つくり手たちの思いがこもったミニバラ。きつとどこかで今日も誰かを笑顔にしています。



今、一押しはインターネットで購入できる「まごころローズ」。一輪のバラに、思いを込めて



約200万鉢を出荷し、全国トップシェアを誇るミニバラ